



新

年一月から月一回の定期寄席をすることになった。これまで季節ごとの年四回を県立大学で、冬を除いた年三回を松江歴史館で定期に開催しているが、それに月例が加わった。場所は、市の中心部殿町にあるカラコロ工房である。ここは81年まで日銀松江支店があったところで、そのころから近年まで松江を離れていたぼくのような者にとっては、工芸館となった今のそれより、重厚な西洋建築そのままでのいかめしい日銀だったころの方がずっとなじみがある。

「カラコロ工房」の名は小泉八雲の著作による。『日本の面影』で、松江大橋を渡る下駄の音について書かれているのはよく知られているが、それにちなむ。現在のような工房となつてすでに四半世紀経つのだが、その間松江にいなかったせいもあって、ぼくはほとんど足を踏み入れたことがなかった。

そのカラコロ工房から去年の秋、落語会をやらなにかと声がかかった。呼ばれればどこにでも行きます、と公言しているのだから、断る理由などない。とんとんと話が進んで寄席を開いたのが十一月だった。カラコロ工房は、中庭がオープンカフェになっており、それをぐるり取り囲んで飲食店が並ぶ。道に面した旧日銀の建物には雑貨屋が入り、地下に下りるとア

クション映画で見るとような巨大な金庫が大小二つ並んでいて、ギャラリイとして利用されている。落語会場となったのは、そのうちの小ぶりな方である。ちょうど小学校の教室と同じくらい広さだが、横が狭く縦に長い。定員二十名だが、教室も同様で入ろうと思えばその倍以上入る。

下見に来たときは、分厚い鉄で覆われているためかエコーが効きすぎて反響が耳障りだったが、実際にお客を入れてしゃべってみると程よく音が吸われて心地よい塩梅になった。マイクがなくても小さな声を十分後ろまで届けてくれるので、子どもたちも聞いていた保護者も「今まででいちばんいいんじゃないですか」と言うほどだった。

程なく、月一回の提案が正式にあつた。こちらとしても望むところだったので二つ返事で引き受けた。他の会場と同じように一回一回単独の落語会にする必要もないので、月をまたいだ企画もしてみたく、こどもたちに問うてみた。すると小泉八雲の怪談をテーマ別にして三カ月やってみたいというおもしろい企画が出された。こどもプロデュースによるこども落語会、1月25日、2月15日、3月15日いずれも午後2時から4時。入場無料だが額を問わない寄付金を募る。みなさま、ぜひおいでください。

老い老いに
木幡智恵美

64

〇二六年が明けた。神戸にいた頃は年末年始が仕事で帰省できなかった長男。御殿場に移ってから、暮れか正月に帰って来るようになった。長男の帰省に合せて長女一家、二男一家が集まっていたのだが、今年は仕事の関係で帰って来たのはクリスマススイブ。娘も二男もまだ仕事で、一堂に会することはできない。ただ、孫二人は冬休みに入っていたので「おつあんと」と半日共に過ごした。一緒に土産物を買に行き、朝ドラ「ばけばけ」で観光客が多くなっている塩見縄手の方を車で回り、月照寺にお参りした。クリスマスに客を取られているのか、時間的に遅かったからか、人は少なかつた。あいにくの雨に濡れながら松平家の菩提寺内をぐるりと巡り、大亀の石像の前に立つ。「松江に住んでたのに、ここに来るのは初めてだわ」と言いながら、息子は同僚に見せるのだとスマホで撮りまくっていた。

元日は娘たち家族五人と二男の家族三人、私たち夫婦合わせて十人でお昼に会食をした。会食の大半は娘が占める。「聞いて、聞いて」と言いながら、一月ほどの出来事を話し出す。患者家族とあいさつした際、ぶつかって目の上を強打したのだ。その時の周りにいた人たちの反応や自分の対応など、たんこぶの写真も見せながら事細かに語った。「姉貴はよくしゃべるなあ。俺はお袋に似てあんまりしゃべらんけど」という二男も結構よくしゃべる。

「兄貴もよくしゃべるようになったようにしたし」。我が子たちは皆父親似なのだ。駐車場が乏しい関係で、皆が集まる場合は夫の車を娘の家に置かせてもらっている。会食が終わる、車を取りに行くため娘の車に乗り込む。五人の家族が乗る車の中で胸の奥から沸いてくるものがあった。娘が大病をしてから二十年近くになる。皮膚科の先生が自分には手に負えないと紹介された先の形成外科の先生が、念のために組織検査に出してくれていた。そのお陰で早く発見でき、手術で取り除くことができたのだ。車の座席満席になったこの一家がこうして元気に新たな年を迎えることができるのは有難いことなのだとしみじみ思う。

夕焼け通信二〇〇六年は、あと少しで六百号という五百九十七号から始まる。ああ、あれから二十年が経ったんだ。

30代フリーター 柯隆という中国出身のエコノミストが、中国経済は2026年も低迷を脱するのが難しく、その理由は習政権が経済も外交も社会の統制もうまくいつていると思ひ込んでいて、思い切った政策転換をしそうにないことにある、とユーチューブで語っていた。

年金生活者 なぜうまくいつていると思ひ込んでいるんだ。

30代 経済について柯があげているのは、新たな5か年計画でAI、半導体、宇宙開発、バイオなど最先端の研究開発を立ち上げていくので、それが中国経済を力強く牽引していくと政権が考えていることだ。

外交については、トランプによる高関税が大幅に引き下げられたうえ、彼の北京訪問、さらに習のワシントン訪問が決まっていることをあげていた。

そして現在の中国社会は失業者の増大などで不安定化しているが、世界最先端の監視システムを持っているので、国民の反抗はそれで抑えられると

政権側は考えていると柯は見ろ。

年金 そういう国家は昔の西欧の絶対王政国家に似ている。経済についていえば、中国が進める最先端の研究開発は、絶対王政下で進んだ遠隔地貿易、植民地貿易のための航路開拓に相当する。中国がトランプの高関税をはね返すことができたのは、レアアースの独占状態のほかに、格段に増強された軍事力があつたからで、これも強力な常備軍を駆使する絶対王政の力による外交に似ている。さらに国民に対する監視、抑圧は、警察組織を地方にまで展開して反体制的な動きを抑えた絶対王政と変わりが無い。

絶対王政は、勃興する商業資本主義をあと押しする重商主義政策をとり、そのための航路開拓を軍事力によつて推し進めた。それは資本主義に必須の世界市場の形成に寄与し、のちの産業資本主義の興隆の基盤となつた。そしてさらにそれを基盤に第3次産業を牽引車とするポスト産業資本主義がグローバルな発展を遂げた。

ない広大な海を進むのと同様だ。いずれも開発に国家のあと押しを必須としている点も似かよっている。

そう理解すると、AIの産業インフラ化は、かつての商業資本主義が形を変えて復活しつつあることの兆候ととらえることができ、さらに言えば、商業資本主義↓産業資本主義↓ポスト産業資本主義というこれまでの段階の移

現在の世界では、商業資本主義↓産業資本主義↓ポスト産業資本主義というこれまでの段階の推移が形を変えて繰り返されようとしているように見える。そのプロセスの高次のバージョンが始まったと言つてもいい。長期的に物事を考える中国人のDNAを共産党政権も受け継いでおり、習政権はなかば無意識のうちに、商業資本主義のバージョンが始まったことを理解していると推察される。

だとしたら、目先の経済の低迷などたいした問題ではない。それで国民が苦しんでも、力で抑えつけて我慢させればいい。重要なのは未来へ向けて偉大な中国を築くことだ。習政権の思考パターンはそうなる。

30代 習らはそこまで先を見通して国家を運営しているのだろうか。仮にそうだとすると、そんな人柱を立てるようなやり方は容認できない。

年金 その通りだが、資本主義はそういうことにはお構いなしに発展してきたし、これからもそうだろう。

行の反復が、あるいはその新たなバージョンが始まったという見方が成り立つ。

30代 それを具体的にイメージできるのか。

年金 新たなバージョンを仮に商業資本主義2・0↓産業資本主義2・0↓ポスト産業資本主義2・0と呼んで、それぞれの段階で新たに形成されるインフラを予測すると、商業資本主義2・0ではすでに大方が認めているAIであり、産業資本主義2・0では自動生産、自動輸送のシステムが考えられる。前者が未知の空間に自由を求めるものであるのに対し、後者は既知の空間に自由を求めるものだ。

しかし、ポスト産業資本主義2・0のインフラは私には具体的にイメージすることができない。インターネットの場合と同様に、新たな自由の可能性の空間が形成されることになるはずだが、量子コンピューターがそれに寄与するだろうということくらいしか言えない。

資本主義を支える重要なインフラは交通網だ。大量の商品の交換によつて成り立つ資本主義は大量の輸送が欠かせないからだ。商業資本主義の時代には、植民地貿易、遠隔地貿易のための航路の開拓が進み、海上の交通網が発達した。次の産業資本主義の段階では、陸と空の交通網が広がった。ポスト産業資本主義の段階に至つて、インターネットが情報を運搬する交通網として形成された。

航路の開拓は、大洋という未知の空間に新たな自由を確保する企てだった。陸と空の交通網の構築は、既知の空間に新たな自由を求めて行われた。そしてインターネットの発達、サイバー空間という、それまで存在しなかった空間をつくり、そこに新たな自由を創出することを意味した。

AIの開発は、商業資本主義時代の航路の開拓に似ている。AIの発達がどんな変化を人間とその社会にもたらすか明瞭でない今の状態は、行く手にどんな危険が待ち受けているかわから